



○應典院寺町倶楽部主催事業○



### 第53回寺子屋トーク 「生活の中にアートを取り戻す! ~これからの芸術基盤形成の方向性~」

生活から祭りが切り離され、建築から美術が切り離されつつある現在。特別な場所へ、特別な格好をして行かなければアートと出会えないような状況になりつつある現在。人々の生活の中へ再度アートの存在を回復し、そしてさらには人々が生活の中で自由にアートを使いこなすためにはどのような対策が必要でしょうか?

第1部 基調講演:加藤種男(アサヒビール芸術文化財団事務局長/横浜芸術文化振興財団事務理事)  
第2部 パネルディスカッション「生活に埋め込むアートのかたち」  
パネリスト:大谷撰(NPO法人DanceBox)/岡部太郎(財団法人たんぼほの家)/タミヤリョウコ(ライター)  
コメンテーター:加藤種男 コーディネーター:山口洋典

7月13日(日) 15:30~ (18:30閉会予定)  
一般/¥1,500 應典院寺町倶楽部会員・学生/¥1,200(学生は受付で学生証をご提示ください)  
終了後、2F気づきの広場にてゲストを囲んで交流会を開催(別途 ¥500)  
「アーティスト割引」有。詳細はwebで。

○應典院寺町倶楽部主催事業○

### 第79回いのちと出会う会 「真帆~あなたが娘でよかった~」

真帆さんは12歳のとき悪性脳腫瘍にかかり20回にも及ぶ手術を繰り返し20歳で亡くなりました。自分が多くの方の愛をいっぱい受けていることに感謝し、自分が前向きに生きることがたかさんの愛への恩返しだ、と明るく周りの人を励まし、医師を目指して手術直前でも勉強されていました。

話題提供者:  
内梨昌代(大阪市立汎愛高校教諭)

7月17日(木) 18:30~20:30  
一般¥1,000 寺町倶楽部会員・学生¥700  
(お茶菓子付き)

○space×drama2008参加公演○

space×drama2008協働プロデュース公演

#### 突劇金魚 「しまうまの毛」

寮の屋上から動物園が見える。小さい動物園。あたしは毎日見下ろして、腕を伸ばし、手のひらで包んでみる。あたしの手の中の、動物園の中の、檻の中の、動物。寝てる?歩いている?歩いている?くさい?寮はいつでも独特においがする。あたしたちはいつの間にかここにたづねて来られて、ここで暮らしている。ここにいるのは、女だけ。ちょっとだけ規律があって、それを守っている。

7月22日(水) 19:30  
7月23日(木) 19:30※アフタートークあり  
7月24日(金) 19:30  
7月25日(土) 15:00/19:00  
7月26日(日) 15:00  
前売り/¥2,000 当日/¥2,300

#### May 「チャンソ」

90年を目の前にした、1980年代後半。古きを重んじることはかっこ悪くて、自分達ではない他者だけを崇めていた。「我々」は七十万人を謳っていたけど、「俺達」は70万人も居なかった。消滅への出発点に立っていることに気付いている。奏でる弦からは、はなから帰りを待たない一言一言が去っていく。遙か先の終わりの光景が記憶に盛り込まれて、まだ見ぬ明日の思い出が既に懐かしい。この地の何処かで生きていく血を過敏に感じて、自分の中に流れる血は濃度を高めて沸騰する。

7月24日(水) 19:00  
7月25日(金) 19:00  
7月26日(土) 14:00/19:00  
7月27日(日) 14:00/19:00  
7月28日(月) 14:00/18:00  
前売り/¥1,800 当日/¥2,000  
高校生以下/¥1,000(当日受付にて学生証をご提示下さい)

#### 本若⇔ケービーズ 「かわうそくよう」

舞台はある田舎町の夏祭り。主役は、10年ぶりに祭りの主役としてその準備に集合した同窓生たち。なぜか今年はさまざまな問題が起き、例年通りに事が進みません。各人のよんどころなき事情も複雑に絡み合い、果たして彼らの、そして祭りの運命やいかに?.....

8月21日(木) 19:30~  
8月22日(金) 19:30~  
8月23日(土) 15:00~/19:00~  
8月24日(日) 13:00~/17:00~  
前売り/¥2,000 当日/¥2,500(日時指定・全席自由)

#### 特攻舞台Baku-団 「病的船団」

船の上に8人の『患者』が集められた。誰も彼も、一般的な社会になじめない『病的』な性格の人間ばかり。政府のバックアップにより、船の上で共同生活を行い、社会になじめるよう『治療』を行うのだという。その中にあって、ひとりたづみ心を閉ざした少年がいた。彼の名はカッセル。彼は心の傷を負って以来、自分の気持ちを口にはせず、日記に綴る生活を続けて来た。

8月27日(水) 19:00  
8月28日(木) 19:00  
8月29日(金) 19:00  
8月30日(土) 13:00/19:00※  
8月31日(日) 15:00  
※印の回は終演後、space×drama2008参加団体代表と應典院主幹・山口洋典によるクローズドトークあり。  
前売り/¥2,300 当日/¥2,500 学割/¥1,800(要学生証)

○大阪市現代芸術創造事業○

#### 関西アート情報ポッドキャスト「ARC Audio!!」特別編 「ふそろいなつものたち」

ポッドキャスト(インターネットラジオ)番組「ARC Audio!!」に出演している関西在住の実験的アーティストたちによる音楽ライブが今年もアップルストア心齋橋にて開催!

ゲスト:peck you!! (シンガーソングライター)・ニユミコ (ダンサー from 花嵐)  
パーフェクトダンサー (ギターデュオ)  
司会:アサダワタル (築港ARCチーフディレクター/大和川レコード)  
蛇谷りえ (築港ARCサブディレクター/アーティスト)

7月19日(土) 19:00~20:30 入場無料 会場/Apple Store, Shinsaibashi 2F theater  
大阪市営地下鉄「心齋橋」下車、御堂筋周防町交差点角

#### 大阪のアートを知り尽くすの会 vol.5 散策ガイドマップ「ギャラリー」編

かつて、文化の中心だったまちと表現される大阪。とはいえ今でも文楽や近代建築などの伝統文化が盛んで、じっくりとものづくりができるまちであり、また同時に前衛的なアートシーンや小演劇界でのその存在感もやはり濃厚ではないでしょうか。この会では参加者皆で、築港ARCのライブ러리資料や雑誌「大阪人」を活用して、大阪の小劇場マップ、大阪モダニズム建築マップ、音楽口クシーンマップなどなど、様々なテーマで作り上げ、文化芸術のまちとして、大阪には何があり、何があったのか、今一度見つめなおしてみます。

7月5日(土) 18:00~20:00 ¥500(お茶、資料代)  
会場/築港ARC

應典院寺町倶楽部 TEL:06-6771-7641 FAX:06-6770-3147 info@outenin.com http://www.outenin.com  
築港ARC(ちっこうアーク) TEL&FAX:06-4308-5517 arc@outenin.com http://www.webarc.jp

今アトセツ

ご覧のとおり、應典院寺町倶楽部「サリュ」がリニューアルした。とりわけ、43号からは会報とも言わず、「ニューズレター」とも言わず、「ニューズマガジン」と表現してきた。マガジンとは雑誌、すなわち定期的な記事、読み物を意味する。私自身、編集に携わってきたのは48号からである。私が行ったきたものはもとより、1997年の創刊当初から、実に読み応えがあるものとして発行されてきたと感じてやまない。

今回のリニューアルの意図は、発行頻度の向上と、発行部数の増加にある。これらを通じて、お寺を拠点に活動するNPOの取り組みへの関心と、社会における存在感を高めていくことを決断したためだ。だからと言って、これまでのサリュに収めてきた行動記録や小論等が必要であるとは捉えていない。これらについては、他のメディア(例えば、インターネット)や、新たな冊子の企画等でまかなっていきたくと考えている。

個人的な印象だが、リニューアルということの中にある「red」ということばが好きだ。「red」という接頭語は、続くことばに対して「再び」という意味をもたらす。実際この間刷り色が変わる、判型がA4版からA5版になる、など、リニューアルの機会を得てきている。パチンコ店の新装開店ではないが、今回のリニューアルを通じて、心機一転、改めて應典院寺町倶楽部と読者との縁をうまく取り持っていきたいと発意することだ。

(編)



5月24日、「ARCトークコンプレッション」の第14回目が開催されました。ゲストは日本の学校現場でここまでできるのかと思わせる程、先駆的な教育づくりを行っている、京都府宇治市立菟道第二小学校の糸井登さんと平盛小学校の藤原由香里さん。会場に30名を超えるお客さんにお集まりいただき、超満員！やはり「アート×教育」というテーマは関心層が多いのでしょうか？アート関係者のみでなく、学校の先生方がたくさん来てくださったことが議論の質を高めたきっかけとなりました。アートプロジェクトとしての「築港ARC」に、アートと直接関係のなかった方々が分野を超えて関わりをもっていくこと。そういう接点をいかに作りだせるかを一番重要視している築港ARCにとって、ひとつの成果が出たのかなと思います。トークの内容は、築港ARC制作のインターネットラジオ「ARCAudio!!!」(http://www.webarc.jp/arcaudio/)にて聴いていただけます。ぜひアクセスしてください。

### アートの学校教育

6月21日からの大阪劇場公開に先駆け、「未来世紀ニシナリ」のプレミア上映を行った今回のコミュニティシネマシリーズ。ロンドンへの取材を行うなど、そのメッセージ性に溢れた本編上映の後、釜ヶ崎で失業問題に取り組む「釜ヶ崎ふるさとの家」共同代表の本田哲郎神父から、実践者と宗教者の立場でお話をいただきました。また、その内容を深める場として、シンポジウムも併催。ゲストには、映画本編にも登場され、実際に西成で就労支援に取り組む佐々木敏明さん、福田久美子さん、そして本田神父。司会として本会事務局長の山口洋典が登場し、それぞれの立場からの西成での取り組みを巡った議論が聞かされ、客席からも活発な意見が飛び出すなど、関心の高さを伺わせる密度の濃い時間となりました。

### 應典院コミュニティシネマシリーズvol.13 「未来世紀ニシナリ」プレミア上映会

### space × drama 2008 総決起集会

6月9日、気づきの広場に應典院舞台芸術祭「space × drama 2008」に参加する5劇団、総勢53名が集結した。今年から結成5年の枠組みが外され、経験・実力共に充実した顔ぶれ。協働プロデュース対象団体に選ばれた「突刺金魚」をはじめとし、在日朝鮮人という独自の視点から物語に切り込む「May」、space × drama 史上初となる劇団同士のユニット「本若さげーピース」、4回目のエントリーにして初の栄冠に挑む「特攻舞台Baku-団」、ポストパフォーマンス公演として、後夜祭を盛り上げる「ミジンコターボ」。個性溢れる彼らの真夏の演劇バトルが幕を開きます。

# 場...

## Interview

### 秋田光彦さん (浄土宗・大蓮寺住職)

行き場を失った若者、空洞化した寺。時代にとっては無価値な両者が融合したとき、したたかでしなやかな、〈場〉が生まれた。

すべては〈場〉からはじまった。大蓮寺住職・秋田光彦は、大蓮寺の塔頭寺院・應典院再建の動機をそう振り返る。應典院が再建されたのは1997年。2年前にオウム真理教事件が起き、この年の夏には神戸の酒鬼薔薇事件が発生している。少年犯罪、不登校、いじめ、援助交際、「普通の子」と評価されてきた若者たちが、身体ごと悲鳴をあげはじめた時代でもあった。

「人間は役に立たないことを真剣に考えたり、立ち止まりながら成長していくもの。若者はその一番敏感な成長期にある存在です。しかし、絶え間なく回転する生産と消費の歯車の中で、彼らの居場所を押しつぶされていくように。一方、都市における寺のありようにも問題を感じていた。コンビニの数をはるかに上回るほど、いたる処に寺はあるが、その多くは社会との接点がない。寺もまた、都



▲旧友、石井聰互監督、松井良彦監督と映画について語る—應典院コミュニティシネマシリーズ vol.12より(08年2月17日)



市なかで孤立していた。時代にはじかれた若者と、時代に取り残された寺。秋田はふたつの問題を前にして思った。「だからこそ、両者が協同して、新たな表を構築する場所がないか。時代に媚びない地点をふみしめながら、若者自らが根本から成長できる場所。その思いが本堂とホールが一体化した、ユニークな劇場寺院を生んだ。この10年、應典院は演劇やアートだけではなく、ケア、仕事まわりのといった社会問題にも積極的発信を重ねてきた。問題提起型より、もっと収益性の高い企画や演劇の充実を、という外部からの声もあったが、秋田はそうしなかった。

「ここは劇場ではなく寺院だ。利益や娯楽の追求は應典院の役割ではない。最近では日本一若者が集まるお寺として全国的に名を馳せる應典院だが、だからこそ一風変わったイベント寺院といった安易な文脈に回収され、消費されるわけにはいかない、と力を込める。一昨年、再建10年を前に秋田は應典院主幹を退いた。現在は2代目主幹・32歳の山口洋典が應典院の企画・運営を取り仕切る。主幹の継承にあたり、秋田はひとつの条件をつけた。得度をうけて、浄土

宗の宗徒となること。寺の生まれでもない者が僧侶となる。しかも、葬儀や法事は勤めない。秋田は「市民僧だ」という。「市場競争にまみれた会社で(他者のために生きる)がオチ。消費社会には、そういう言葉が届かない場」がほとんどだ。だからこそ、宗教者が寺という場所では何を伝えるのかは、じつに重要。世間に媚びず、出世間を気取るのでもなく、学校でも家庭でも語られなくなった言葉にこそ、こだわってほしい。それを言葉と自らの行いで届けていくのが〈市民僧〉の役割。

「これまで開かれた場を語る」とき、私は公言という言葉を置いてきたが、一方で〈公共〉からこぼれ落ちるものにも惹かれてきた。ひとりのカン患者、ひとりの自閉児など、固有の生き方にてそ、けつして括りどれない、痛切なほどの存在感やリアリティを感じる。社会の枠組みに容易にとりこまれない場の存在、そしてそのような〈場〉だからこそ照らし出される、幾多の〈個〉の物語がある。



# 慈 Report

## オリンピックならぬ「仏リンピック」。

「いのちの問題に触れる」去る5月11日、恒例の「寺子屋トーク」の第52回として、「チベット発東京経由仏リンピック」大阪大会なる緊急シンポジウムを行いました。企画の背景にあるのは、緊迫したチベット情勢から、2ヶ月が経とうとしているなかの間、オリンピック開催の是非論に重ねて、弾圧と虐殺に対する悲しみと支援の輪が広がってきたためです。実際、NGO・NPOやメディアだけでなく、仏教寺院等でも、深い学びの場が創出されていきました。そうした中、應典院寺町倶楽部の視点としては、今回の問題の本質は、チベットと中国のあいだの領土の問題ではなく、政治と宗教の両面から取り上げられるべき、慈悲と共生に関する「いのちの問題」が横たわっていることと捉えることにしました。今回の寺子屋トークには「モデル」がありました。それは、東京・港区にある青松寺で、4月29日に「臨時仏教ルネッサンス塾」として開催された、その名も「ひと足先に仏(ぶ)リンピック」でした。これは、仏教の柱である「智慧の獲得(学ぶこと)、深く知る(こと)、慈悲の実践(心からの思いやりをもって行動すること)、この2つが、真のオリンピック精神の実現と共鳴共振するのではないか、という問いから催されたもので、

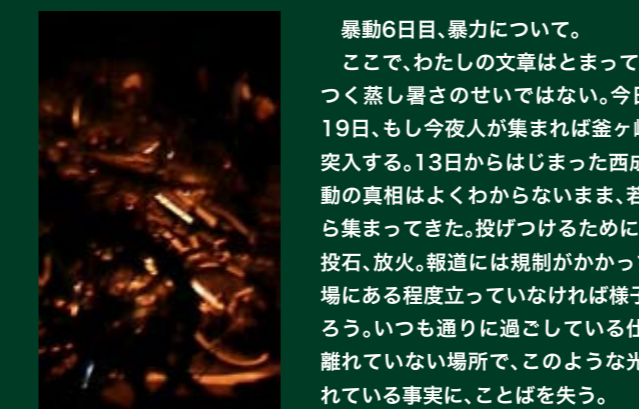
「選手団」になぞらえたゲストは、應典院でもお馴染みの土田紀行氏(東京工業大学大学院准教授)らが務め、170名を超える方々に参加をいただいたとのこと。語り場の「成果リレー」そこで、東京で行われた「仏リンピック」という名前を、「聖火」ならぬ「成果」リレーとして受け継いで、寺子屋トークのイベント名に使わせていただきました。もちろん、使用に当たっては、先方に許可をいただきました。東京では開催前に法要を行い、終了後には観音像に結ばれた五色のテープを参加者が手にして、願いを捧げたとのこと。そこで、大阪では、シンポジウム開催前には漢民族を含めた犠牲者供養の法要を行い、終了後には今後の平和を願って、撞木に結ばれた五色の紐を参加者が握って、「誓いの鐘」を10回撞くという演出を行いました。そうした供養と誓いの場のあいだに行われたシンポジウムは、土田紀行さんの基調講演に続いて、熊本県玉名市にある蓮華院誕生寺の川原英照住主と、チベット仏教普及協会(愛称・ポタラカレッジ)のクンチョック・シタル副代表によるパネルディスカッションが行われました。東京と同じく、参加者を「選手団」になぞらえて、

議論を展開しました。当初の選手団に加えて、映画「シンヨン監督」釈徹宗さん(如来寺住職)、木村慶司さん(大阪市仏教青年会副会長)なども参加し、熱い議論が交わられました。議論の中で特に興味深かったのは、「なぜチベット人が悲しんでいるか」という問いから始まる。チベットからです」という、シタルさんのことばでした。チベット仏教は、戒律を中心に自らを見つめる上座部仏教と世の中を救う思想や実践としての大乗仏教と、意識から見た

世界に関する密教と、順に学びを深め、積極的に他者に働きかけていくものです。そして働かなくては、社会のためであり、今後の未来のためであるにも関わらず、その行動が封じられてしまうことが、怒りとなっていくことでした。抑圧されている現状に対する憂いではなく、展望が閉じられた未来を開いていくための積極的な怒りであることを改めて知りました。未来に思いを馳せて行動することの大切さを、主催者側も学んだ一日でした。

## Column

### 釜ヶ崎の夏がはじまる



上田假奈代(詩人) 1969年生まれ。3歳より詩作。17歳から朗読をはじめ、02年から障がいをもつ人や社会人、子ども対象の詩のワークショップを行う。01年「詩家宣言」を行い、全国で活動をつづける。03年コラムをたちあげ「表現と自立と仕事と社会」をテーマにホームレスや高齢者、コート、教育、環境など社会的な問題にも取り組む。西成区山王でインフォショップ・カフェ・コラムを運営。NPO法人こえとことばとこころの部屋(コラム)代表 サイトhttp://www.kanay-net.com ブログhttp://booksarch.exblog.jp

暴動6日目、暴力について。ここで、わたしの文章はとまってしまう。肌にはりつく蒸し暑さのせいではない。今日は2008年6月19日、もし今夜人が集まれば釜ヶ崎暴動は7日目に突入する。13日からはじまった西成警察署前の暴動の真相はよくわからないまま、若者たちが各地から集まってきた。投げつけられるためにめくられる道路、投石、放火。報道には規制がかかっているようで、現場にある程度立っていないければ様子はわからないだろう。いつも通りに過ごしている仕事場と1キロと離れていない場所で、このような光景が繰り広げられている事実に、ことばを失う。雨が降り出し、「今日はもう暴動ないやろう」と皆が口にしたとき、胸をなでおろし、梅雨でよかったと思ったのだ。暴動について少しでも知っている人はさまざまに語る。その断片を拾いながら、わたしはハツとしたり、いらだちを覚えたりしている。あの晩、投石と罵声という表現の仕方しかなかった。暴力のための暴力としての表現。そのことがとても悲しかった。無力だった。應典院で詩のワークショップをはじめ7年になる。秋葉原の事件の直後、参加者たちは口々にゲータイサイトに書き込まれたことばについて語った。あの書き込みに応答があれば、事件は違うかたちに

# 慈

なったのではないだろうか、と言う。表現したものが受けとめられ、返ってくる「応答」という感覚はなによりも、このワークショップで大切にされていることだった。ワークショップでのわたしの仕事はそこにあるとよく自覚しているが、いまわたしが生きている社会という場で孤独な状態にあっての「応答」はどうやったら作られるのだろうか。無名の人生がどれほど尊いかということを忘れてちで、消費者として生きさせられる違和はけっして暴力ではなく、関係性のなかで取り戻したい。